熊本保健科学大学研究誌
Journal of Kumamoto Health Science University No.20：19－29

［研究報告］

# 特別養護老人ホームが運営する認知症カフェの参加者がもつ参加の意義

角　　マリ子　　多久島　寛　孝

Significance of participation in the activities of a dementia café managed by a special nursing home for older adults

Mariko SUMI, Hirotaka TAKUSHIMA

**和文抄録**

認知症カフェは，認知症当事者・介護者支援を実現する重要な社会資源であるが，参加者減少や閉鎖等が生じている。認知症カフェへの参加意義を解明するために，特別養護老人ホーム運営の認知症カフェ参加者（認知症当事者・介護者３名，地域高齢者３名）を対象に，１年間フィールドワークとインタビューを行い，エスノグラフィの手法を用いて質的帰納的に分析した。その結果，以下の結論を得た。

１．認知症当事者・介護者の参加意義は，「体調に気遣い，毎日の暮らしの中での愚痴や不満に耳を傾けてくれる認知症カフェ実施者が存在し，これまで暮らした楽しい時間を回顧できる」であった。

２．地域高齢者の参加意義は，「少しでも健康を維持したいと希求し，そのための行動が叶い，外出や行事を楽しむ機会がある」であった。

認知症当事者・介護者，地域高齢者がもつ認知症カフェへの参加意義は，それぞれ異なることを理解し運営する必要があることが示唆された。

**キーワード：認知症カフェ，特別養護老人ホーム，参加意義，認知症当事者・介護者，地域高齢者**

## Ⅰ．はじめに

認知症カフェは，我が国の認知症施策である認知症施策推進大綱において，認知症当事者を介護する者の負担軽減のために，全市町村に普及することを目標としている社会資源である。令和2年度実績調査によると，認知症カフェは1518市町村で実施され，設置主体別では特別養護老人ホーム（以下，「特養ホーム」とする）を含む介護サービス施設・事業者28％と最も高い割合で実施されている[1)]。特養ホームは，利用者への介護・援助サービスの質を重要視しながらも，自施設の持つ設備や人材等の資源やノウハウを最大限に活用し，認知症カフェ等の地域住民との活動にも注力しようとしており[2)]，このような特養ホームの活動の結果が，先に示した認知症カフェの設置主体別内訳にあらわれているといえる。

認知症カフェについては，認知症当事者の楽しみや対人交流の増加等，認知症当事者への効果がこれまで報告されており[3－10)]，認知症当事者を介護する者への効果については，認知症の症状や福祉サービスに関する情報が得られ[11)]，介護経験や不安の吐露等ができる[12)]とされていた。一方で，認知症カフェ

所属
熊本保健科学大学　保健科学部　看護学科
責任著者：sumi@kumamoto-hsu.ac.jp

の現状は，認知症当事者とその介護者の参加はほとんどなく，参加していても極少数とされ[13]，特養ホームが運営する認知症カフェにおいても同様の結果[14]であった。また，認知症当事者とその介護者は，認知症カフェに参加する人の多くが地域に居住する高齢者であるため，認知症カフェに参加することによって不利益が生じることへの恐れや羞恥心をもっていること，認知症カフェの内容を難しく感じていることが示された。他方，参加者の大多数である地域に居住する高齢者は，顔見知りが集まる場を求めており，認知症当事者とその介護者との間には乖離が生じていたことが明らかになったが，これらの結果は認知症カフェの実施者が捉えたものである。また，前述した課題を抱えつつ，認知症当事者とその介護者，地域に居住する高齢者が認知症カフェに参加していることは事実である。それらの人々がどのような価値を見出し参加しているのか，つまり認知症カフェの参加者の視点からみた参加の意義を明らかにすることは，認知症カフェが「認知症の人とその家族・友人にとって，自分らしさを発揮し，社会とかかわりを持てる場所」[15]であるための示唆を得る上で，最も重要な視点である。しかし，これらを明らかにしたものは現時点では見当たらなかった。

本研究は，特養ホームが運営する認知症カフェに参加する認知症当事者とその介護者，地域に居住する高齢者が，どのような参加の意義をもって認知症カフェに参加しているのかを，それぞれの人の視点から明らかにする。なお，認知症カフェに参加する人は，認知症当事者とその介護者，地域住民だけではなく，ボランティアや専門職も含まれているが[15]，本研究では，認知症当事者とその介護者，地域に居住する高齢者を対象とし，これらの人々を認知症カフェ参加者とする。

## Ⅱ．方法

### 1．研究参加者

X市にある特養ホームが運営する認知症カフェに参加している認知症カフェ参加者で，研究の趣旨を説明して承諾が得られた人であった。

研究対象を選定する際，先行研究[14]から導いた設置率が高いとされる人口50～100万人未満，高齢化率25～30％未満の自治体に該当し，研究者がアクセスしやすいという条件を設け，それらをすべて満たすX市を選定した。そして，X市内の特養ホームが運営する認知症カフェで，研究同意の得られた3か所の認知症カフェの実施者から，認知症カフェ参加者の中から紹介された人であり，さらに研究者が研究参加の自由等の倫理的配慮を示して同意を得られた人であった。

なお，研究同意の得られた3か所の認知症カフェの運営状況については，表1に示した。

**表1　研究参加者の参加する認知症カフェの運営状況**

| 研究参加者 | | A | B | C | D | E | F |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 認知症カフェの運営状況 | 開催頻度や時間数 | 月2回，5時間 | 月1回，2時間 | 週2日，5時間 | | | |
| | 場所 | 特養ホームの所有する建物内 | 特養ホームの立地する地区公民館 | 特養ホームが所有する建物内 | | | |
| | 対象者 | 制限を設けていない | | | | | |
| | 内容 | 定期的に開催し，お茶を飲みつつ様々な活動を行う | | | | | |
| | | 例：認知症に関する講話，レクリエーション，お茶を飲みながらの交流，昼食 | 例：認知症に関する講話，体操，レクリエーション，お茶を飲みながらの交流 | 例：認知症に関する講話，運動，お茶を飲みながらの交流，昼食，旅行 | | | |
| | スタッフ | 専門職10名程度，ボランティア5～6名 | 専門職4～5名，民生委員1名，ボランティア1名 | 専門職1名，ボランティア数名 | | | |
| | 参加人数 | 30名程度 | 10名程度 | 10名程度 | | | |
| | | 認知症当事者や介護者は参加していない，もしくはごく少数 | | | | | |

２．研究期間

１）研究期間：2018年７月から2022年８月

２）調査期間：2018年12月から2019年12月

３．研究方法

１）研究デザイン

本研究では，認知症カフェに参加する意義を認知症カフェ参加者自身の視点から把握することを目的とした。そのため，研究対象者との相互作用によって当事者のものの見方や生活を把握し，当事者の世界を真に理解することを目的としているエスノグラフィの手法[16]を参考にした質的帰納的研究を選択した。

２）データ収集方法

データ収集は，研究調査に承諾が得られた３か所の認知症カフェで，研究者が研究対象である集団の一部となって参加観察を行う「観察者としての参加者」，つまり認知症カフェに参加している者として認知症カフェ参加者と活動をともにしながら，参加観察やインタビューを行った。具体的には，１年間の調査期間のうち，各認知症カフェの開催日に月１～２回の頻度で参加し，開催時間中滞在した。

まず，フィールドワークによって認知症カフェの様子を把握し，研究参加者の態度や行動，認知症カフェ実施者や研究参加者同士の関わり，会話等の観察した内容をノートに記録した。インタビューの内容は，フィールドワークで得た内容を基に，研究参加者が認知症カフェに参加している意義や参加によって得ているもの，参加のきっかけや生活状況などを自由に語ってもらい，許可を得てノートに記録した。なお，インタビューは，認知症カフェの行われている建物内の本人が希望する場所で，個別にデータを収集した。

３）分析方法

分析に用いるデータは，インタビューによって得られた記録とした。データの分析は，以下の手順で行った。

(1) 認知症カフェ参加者の概要

① 認知症カフェ参加者のインタビューによって得られた記録から，認知症カフェ参加者の年齢・性別・居住形態などについて整理した。

(2) 認知症カフェ参加者の参加意義

認知症カフェ参加者の参加意義の分析は，Spradley[16]，麻原[17]が示す手法を参考に行った。

① 認知症カフェ参加者のインタビューによって得られた記録から，認知症カフェに参加している意義を表している箇所を認知症カフェ参加者ごとに抜き出し，コードとして表した。

② 認知症カフェ参加者ごとに抜き出したコードについて，類似性を検討した。その際，言葉（X）と言葉（Y）をつなぐ９つの意味関係を手がかりとした。９つとは，1. 完全な包含（X はＹの種類である），2. 空間（X はＹの場所 / 一部である），3. 因果関係（X はＹの結果 / 原因である），4. 理論的根拠（X はＹを行う理由である），5. 活動の場（X はＹを行う場所である），6. 機能（X はＹに用いられる），7. 目的と手段（X はＹを行う方法である），8. 連続 / 順序（X はＹの段階である），9. 特徴（X はＹの特徴である）である。共通の意味内容を持つものを集めて，サブカテゴリとして抽出した。

③ 認知症カフェ参加者すべてに抽出されたサブカテゴリについて，類似性を検討しながら統合し，カテゴリとして表した。

④ 統合したカテゴリとサブカテゴリを一覧に表し，認知症カフェ参加者の参加の意義を表すテーマを抽出した。テーマは，多くのカテゴリの中に繰り返し出現するあらゆる原則，それが潜在的なものであれ顕在的なものであれ，文化的意味のサブシステム間の関係として機能するもの[18]としていることから，この点を活用しながらテーマを抽出した。

データの解釈やカテゴリの抽出にあたっては，質的研究の経験を持つ複数の研究者で行い，信用性と確実性の確保に努めた。

４．倫理的配慮

倫理的配慮については，認知症カフェを運営する特養ホームの代表者および認知症カフェ実施者に対して，研究の目的や方法，依頼内容，研究参加の自由，プライバシーの保護等について説明し，本研究への協力および研究参加者の紹介を依頼した。また，認知症カフェ実施者から紹介を受けた認知症カフェ参加者に対し，研究参加の自由，プライバシーの保護等を説明し，研究協力を依頼した。

本研究は，熊本保健科学大学ライフサイエンス倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号18049）。

## Ⅲ．結果

本研究の研究参加者の概要を表２に表した。また，認知症当事者とその介護者，および地域に居住する高齢者それぞれの参加の意義を分析した結果について，カテゴリ，サブカテゴリを表にしてまとめた（表３・４）。

１．研究参加者の概要（表２）

研究参加者は６名，１か所の認知症カフェにつき１～３名であった。６名のうち，認知症当事者１名，介護者２名，地域に居住する高齢者３名であった。年齢は，70代１名，80代３名，90代２名であった。性別は，男性１名，女性５名であった。居住形態は，夫婦２人暮らし１名，家族と同居２名，独居３名であった。面接時間は，14～37分（平均23.83分）であった。

２．認知症カフェ参加者の参加意義に関するカテゴリ，サブカテゴリ

認知症カフェ参加者の参加意義は，すべての研究参加者の93コードを用いて分析を行った。その結果，認知症当事者とその介護者，および地域に居住する高齢者それぞれの参加意識に関するカテゴリ，サブカテゴリとして表された。認知症当事者とその介護者，地域に居住する高齢者それぞれの参加意義に関するものは，２つのカテゴリと４つのサブカテゴリであった。

以後，カテゴリを示す際には【 】，サブカテゴリは＜ ＞，研究参加者の言葉は『 』，研究参加者の言葉の最後の〔 〕内に示すアルファベットは研究参加者を表し，認知症当事者とその介護者，地域に居住する高齢者それぞれの参加意義に関する各カテゴリを説明する。

**表２　研究参加者の概要**

| 研究参加者 | A | B | C | D | E | F |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 研究参加者の詳細 | 介護者 | 介護者 | 地域に居住する高齢者 | 認知症当事者 | 地域に居住する高齢者 | 地域に居住する高齢者 |
| 年齢 | 80代 | 90代 | 80代 | 80代 | 90代 | 70代 |
| 性別 | 男性 | 女性 | 女性 | 女性 | 女性 | 女性 |
| 居住形態 | 独居 | 夫婦2人暮らし | 家族と同居 | 家族と同居 | 独居 | 独居 |
| 面接時間 | 32分 | 14分 | 37分 | 22分 | 17分 | 21分 |

**表３　認知症カフェに参加している認知症当事者と介護者の参加意義に関するカテゴリ，サブカテゴリ**

| カテゴリ | サブカテゴリ |
|---|---|
| 【私を知る認知症カフェ実施者が，体調を気遣い，話を聴いてくれる】 | ＜私を知る認知症カフェ実施者が，家族への愚痴など私の話を聴いてくれる＞ |
| | ＜男性参加者が少なく寂しさを感じるものの，私の介護経験を知る認知症カフェ実施者が体調を気遣ってくれる＞ |
| 【認知症当事者のよいところやともに暮らした楽しい時間を思い出す機会を得る】 | ＜認知症当事者のよいところやともに暮らした楽しい時間を思い出す＞ |
| | ＜昔懐かしい場所への外出を楽しむ機会を得る＞ |

**表４　認知症カフェに参加している地域に居住する高齢者の参加意義に関するカテゴリ，サブカテゴリ**

| カテゴリ | サブカテゴリ |
|---|---|
| 【身体的老化や老化による社会性の変化を自覚するが，少しでも健康を維持するための行動が叶う】 | ＜視聴覚や歩行能力の低下などの老いを自覚するが，少しでも元気でいたいと願って運動する＞ |
| | ＜普段は会話の機会の減少や他者との関係構築の難しさを感じるが，顔見知りが集まり言いたいことが話せる＞ |
| | ＜物忘れを自覚し，外出の機会を得て人と会うことで対策をする＞ |
| 【外出や季節の行事を楽しむ機会を得る】 | ＜外出や季節の行事を楽しむ機会を得る＞ |

1）認知症カフェに参加している認知症当事者とその介護者の参加意識に関するカテゴリ，サブカテゴリ（表３）

認知症カフェに参加している認知症当事者とその介護者は，【私を知る認知症カフェ実施者が，体調を気遣い，話を聴いてくれる】【認知症当事者のよいところやともに暮らした楽しい時間を思い出す機会を得る】という２つのカテゴリで表される認知症カフェへの参加意義をもっていた。以下に，それぞれのカテゴリを説明する。

(1)【私を知る認知症カフェ実施者が，体調を気遣い，話を聴いてくれる】

このカテゴリは，＜私を知る認知症カフェ実施者が，家族への愚痴など私の話を聴いてくれる＞＜男性参加者が少なく寂しさを感じるものの，私の介護経験を知る認知症カフェ実施者が体調を気遣ってくれる＞という２つのサブカテゴリで構成された。認知症当事者とその介護者は，普段の生活の中で家族への不満をもっていることや，認知症カフェの男性参加者の少なさに寂しさを感じているが，認知症カフェ実施者がそのような私に関心を寄せ，気遣い，話を聴いてくれるという参加意義を認知症カフェにもっていた。

＜私を知る認知症カフェ実施者が，家族への愚痴など私の話を聴いてくれる＞

『今はなにも家事をしない。孫がしてくれるし，子どもが何でもしてくれる。ばあさんは危ないって言ってね，家事をさせてくれない。前は子どもたち家族も忙しかったし，私がお弁当作ってあげたり，夕食の準備をしたりしていたけど。家にいてもなにもしていないのよね。家ではなにもできない。こんな話を，いつも先生（認知症カフェ実施者）は，わたしがここに来たら寄ってきて聴いてくれるし，いつも心配してくれる。〔D〕』

＜男性参加者が少なく寂しさを感じるものの，私の介護経験を知る認知症カフェ実施者が体調を気遣ってくれる＞

Ａさんが通う認知症カフェでは男性は極少数であり，Ａさんは会場の隅にひとり座っていたが，認知症カフェ実施者等のスタッフから声をかけられると笑顔で話をしている様子がみられた。

『（当日の認知症カフェの会場を）みてわかると思うんだけど，男は，参加者が少ないんだよ。ほんとうに少ない。そこが寂しいところだね。うちの妻が具合悪くなってから，自分のことは自分でしていたのだけどね。いまでも毎日食事の準備をしてるよ。あまり種類は多くないけれど，自分でやっている。うちの妻をみながら（介護しながら），自分のこともしてきたものだから，ここの○○さん（Ａさんが通う認知症カフェ実施者）がいつも気にかけてくれてね。体調は大丈夫か，ってね。ここにくれば，○○さんが声をかけてくれるし，話を聴いてくれる〔A〕』

(2)【認知症当事者のよいところやともに暮らした楽しい時間を思い出す機会を得る】

このカテゴリは，＜認知症当事者のよいところやともに暮らした楽しい時間を思い出す＞＜昔懐かしい場所への外出を楽しむ機会を得る＞という２つのサブカテゴリで構成された。認知症カフェの行事として，過去居住していた場所など懐かしさを感じる場所への外出機会を認知症当事者が得ることや，認知症当事者のよいところを再確認し，これまでともに暮らした楽しい時間を介護者が回顧するという参加意義を認知症カフェにもっていた。

＜認知症当事者のよいところやともに暮らした楽しい時間を思い出す＞

Ｂさんは，認知症である夫と二人暮らしであり，在宅で夫の介護をひとりで行っていたものの，最近は認知症カフェ実施者が勤務する特別養護老人ホーム関連のデイサービスに夫は通い始め，同時にＢさんは認知症カフェに通いだしていた。

『主人（Ｂさんが現在介護している夫）は，昔から面白いひとで。ひとを喜ばすのが好きな人で。主人がいたから，楽しい人生を歩むことができました。いつも二人で笑っていました。苦しいときもあったけど，主人と二人だったから頑張ってこれました。最近は，主人に笑顔がでていなかったけれど，デイサービスに行き始めて笑顔がでてきました。△△さん（Ｂさんが通う認知症カフェ実施者）は，主人のデイサービスでの様子を知っていて，

ここで話してくれる。それが，とてもうれしくてね。昔の主人を思い出す〔B〕』

＜昔懐かしい場所への外出を楽しむ機会を得る＞

戦後，D さんは，幼少時に海外から家族と X 市に引き揚げてきて育った。結婚後は，別の地域で暮らしていた。

『（戦後，海外から）引き揚げてきて。□□（戦後すぐ，D さんが X 市内で暮らした場所）で育った。だからね，□□にできた，なんていうのかな，あの新しい建物ができたでしょう・・・。そうそう！今度あそこ（戦後すぐ，D さんが X 市内で暮らした場所）に行くでしょ。楽しみなのよ。ずいぶんかわっているのだろうねえ。あのころはなにもなくてねえ。家族みんな，苦労したのよ。でもね，とても楽しかったのよ。ここ（D さんが通う認知症カフェ）は，懐かしい場所に連れて行ってくれる。自分ではなかなか，行けない〔D〕』

以上の分析結果から，認知症当事者とその介護者がもつ認知症カフェの参加意義を表すテーマとして，「認知症当事者とその介護者は，体調に気遣いながら毎日の暮らしの中での愚痴や不満に耳を傾けてくれる認知症カフェ実施者が存在し，認知症当事者とその介護者がこれまで暮らした楽しい時間を回顧できること」が示された。

２）認知症カフェに参加している地域に居住する高齢者の参加意識カテゴリ，サブカテゴリ（表４）

認知症カフェに参加している地域に居住する高齢者は，【身体的老化や老化による社会性の変化を自覚するが，少しでも健康を維持するための行動が叶う】【外出や季節の行事を楽しむ機会を得る】という２つのカテゴリで表される参加意義をもっていた。以下に，それぞれのカテゴリを説明する。

⑴【身体的老化や老化による社会性の変化を自覚するが，少しでも健康を維持するための行動が叶う】

このカテゴリは，＜視聴覚や歩行能力の低下などの老いを自覚するが，少しでも元気でいたいと願って運動する＞＜普段は会話の機会の減少や他者との関係構築の難しさを感じるが，顔見知りが集まり言いたいことが言える＞＜物忘れを自覚し，外出の機会を得て人と会うことで対策をする＞という３つのサブカテゴリで構成された。地域に居住する高齢者は，視聴覚や歩行能力等の身体的老化と，他者との関係構築等の難しさ，物忘れを自覚するものの，少しでも元気でいたいと健康維持を希求し，そのための行動が叶うという参加意義を認知症カフェにもっていた。

＜視聴覚や歩行能力の低下などの老いを自覚するが，少しでも元気でいたいと願って運動する＞

『ここ（C さんが通う認知症カフェ）で，結構身体を動かすのよ。家族の迎えを待っている間に，自転車（C さんが通う認知症カフェに設置されているエルゴメーター）を漕いだりしている。眼も耳も悪くなってきたけど，足もね，弱くなるでしょう。ここに通って，ちょっとでも元気でいたいから。〔C〕』

＜普段は会話の機会の減少や他者との関係構築の難しさを感じるが，顔見知りが集まり言いたいことが言える＞

『外にでてもね，お友だちにすぐなれるということが私達にはないものだから。でも，家にいてもね，家族も私の話を聞いてくれないのよ，話をしたいけど。ここでは顔見知りの人たちばかりで。家族は私の話を聴いてくれない，なんて話が出て。言いたいことが言えるの。〔F〕』

＜物忘れを自覚し，外出の機会を得て人と会うことで対策をする＞

『ちょっとね，物忘れが出てきているような感じがあるの。外に出ないと人と話さないから，気がけて外に出るようにしている。ここ（E さんが通う認知症カフェ）は，外に出るいい機会。ここにくれば，人と会うことができるから。〔E〕』

⑵【外出や季節の行事を楽しむ機会を得る】

このカテゴリは，＜外出や季節の行事を楽しむ機会を得る＞という１つのサブカテゴリで構成された。地域に居住する高齢者は，外出や季節の行事を楽しむ機会を得るという参加意義を認知症カフェにもっていた。

＜外出や季節の行事を楽しむ機会を得る＞

『外に出る機会がないのよ。でも，ここ（Fさんの通う認知症カフェ）にくると，どこにでも連れて行ってくれる。温泉に行ったり，この近くの宴会場にいって新年会や忘年会もしたよ。楽しいのよ，ここの新年会。それが楽しみなの。〔F〕』

以上の分析結果から，地域に居住する高齢者がもつ認知症カフェの参加意義を表すテーマとして，「地域に居住する高齢者は，少しでも健康を維持したいと希求し，そのための行動が叶い，外出や行事を楽しむ機会があること」が示された。

## Ⅳ．考察

特養ホームが運営する３か所の認知症カフェで調査を行ったが，研究同意の得られた認知症カフェ参加者６名のうち，認知症当事者とその介護者，地域に居住する高齢者が半数ずつであり，特に認知症当事者は１名であった。研究参加の同意を得た認知症カフェ数においても３か所であり，研究参加者数のみならず，対象地域，運営主体も限られているため，認知症カフェの参加の意義については限定されている可能性を含んでいる。本研究で明らかになった認知症カフェに参加している認知症当事者とその介護者の参加の意義は，「体調に気遣いながら，毎日の暮らしの中での愚痴や不満に耳を傾けてくれる認知症カフェ実施者が存在し，認知症当事者とその介護者がこれまで暮らした楽しい時間を回顧できること」であった。一方，地域に居住する高齢者は，「少しでも健康を維持したいと希求し，そのための行動が叶い，外出や行事を楽しむ機会があること」であった。これらから，双方の参加の意義に相違が生じていることが明らかになった。先行研究での認知症カフェ実施者の視点での結果でも乖離が指摘されており，具体的には，認知症当事者とその介護者は，認知症カフェの内容の難しさや，顔見知りが集まることで生じる不利益への恐れや羞恥心を抱き，参加自体に障壁を感じていたこと，一方，地域に居住する高齢者は，認知症カフェの内容に身体活動や会食などを通じた顔見知りが集まる場を求めていたことである[19]。これらから，１．認知症当事者とその介護者がもつ認知症カフェの参加意義から考える認知症カフェのありよう，２．地域に居住する高齢者のもつ認知症カフェの参加意義から考える認知症カフェのありようについて，認知症カフェ実施者が捉えた先行研究結果と比較しながら述べる。

### １．認知症当事者とその介護者がもつ認知症カフェの参加意義から考える認知症カフェのありよう

本研究では，認知症当事者とその介護者が，「体調に気遣いながら，毎日の暮らしの中での愚痴や不満に耳を傾けてくれる認知症カフェ実施者が存在し，認知症当事者とその介護者がこれまで暮らした楽しい時間を回顧できること」という参加意義をもっていることが明らかになった。

先行研究での認知症カフェ実施者の視点[19]では，顔見知りが集まることで生じる不利益への恐れや羞恥心を抱き，参加自体の障壁を感じていたことが明らかになったが，他の研究においても，認知症当事者とその介護者が周囲に理解してもらうことができず，孤独感や不安を抱いているとしている[20-21]。本研究では，このような結果は認められなかったが，この理由としては，認知症当事者とその介護者が３名という少なさが影響していることが考えられる。また，本研究結果のカテゴリ【私を知る認知症カフェ実施者が，体調を気遣い，話を聴いてくれる】内の２つのサブカテゴリ＜私を知る認知症カフェ実施者が，家族への愚痴など私の話を聴いてくれる＞＜男性参加者が少なく寂しさを感じるものの，私の介護経験を知る認知症カフェ実施者が体調を気遣ってくれる＞から，認知症当事者とその介護者に関心を寄せ，気遣い，話を聴いてくれる認知症カフェ実施者の存在を得ていたことが影響していることが考えられる。

そのような認知症カフェ実施者のかかわりに加えて，【認知症当事者のよいところやともに暮らした楽しい時間を思い出す機会を得る】内の２つのサブカテゴリ＜認知症当事者のよいところやともに暮らした楽しい時間を思い出す＞＜昔懐かしい場所への外出を楽しむ機会を得る＞からも，認知症カフェの行事として，過去居住していた場所など懐かしさを感じる場所への外出機会を認知症当事者とその介護者が得ることや，認知症当事者のよいところを再確認し，これまでともに暮らした楽しい時間を介護者が回顧するという参加意義を認知症カフェにもっていたことから，そのような情緒的対応を求めていたと考える。介護者は，他者との交流等の心休まる

居場所を得たことで，認知症当事者に自分らしく向き合うことができるとされ[22]，認知症カフェが認知症当事者とその介護者にとって心休まる居場所となれるよう，認知症当事者とその介護者の話を聴くことや，認知症当事者とその介護者の強みを見出し，伝えること，認知症当事者とその介護者がともに歩んだ過去を想起できるような話題を提供することなどの情緒的対応を認知症カフェで行っていくことが求められる。

これらのことから，認知症当事者とその介護者の状況をよく知る特養ホームスタッフや認知症カフェ実施者のかかわりが，認知症カフェへの参加の意義に影響していると捉えられ，これは，介護サービスを展開する事業者が，認知症カフェの設置主体であることの利点があるといえる。認知症カフェの設置主体については，全国の1518市町村で実施される認知症カフェのうち，特養ホームを含む介護サービス施設・事業者が28％と最も高い割合を占めていた[23]。認知症カフェがそれらの事業者によって運営されることで，認知症当事者とその介護者の支援に寄与できる可能性があるといえる。

２．地域に居住する高齢者のもつ認知症カフェの参加意義から考える認知症カフェのありよう

本研究では，地域に居住する高齢者が，「地域に居住する高齢者は，少しでも健康を維持したいと希求し，そのための行動が叶い，外出や行事を楽しむ機会があること」という参加意義をもっていることが明らかになった。

先行研究での認知症カフェ実施者の視点[19]においても，身体活動や会食などを求める同様の結果が示され，本研究結果の２つのカテゴリ【身体的老化や老化による社会性の変化を自覚するが，少しでも健康を維持するための行動が叶う】【外出や季節の行事を楽しむ機会を得る】と共通する。それらのカテゴリ内の４つのサブカテゴリ＜視聴覚や歩行能力の低下などの老いを自覚するが，少しでも元気でいたいと願って運動する＞＜普段は会話の機会の減少や他者との関係構築の難しさを感じるが，顔見知りが集まり言いたいことが言える＞＜物忘れを自覚し，外出の機会を得て人と会うことで対策をする＞＜外出や季節の行事を楽しむ機会を得る＞から，老いによる自らの身体に起こる変化，配偶者との別離等による居住形態の変化に適応しようとしているものの，『外出したいができない』『話をしたいができない』等，独居・家族と同居に関わらず葛藤する気持ちを抱えていたことが示された。これは，地域に居住する高齢者が孤立している状況を表しているともいえる。高齢者の中には，気軽に会話し，相談できるような豊かな人間関係を築くことができず，社会的に孤立している状態にあり[24]，中でも男性は，配偶者等の限定された関係に終始しているとされている[25-26]。そのため，地域包括支援センターや市町村保健師，民生委員等の地域の関連機関との連携による，地域に居住する高齢者に関する情報の把握と共有が必要である。加えて，同居家族や地域住民に向けて，地域に居住する高齢者の現状を発信し，ひとりひとりが高齢者への対応を考える機会を設けることも必要である。

３．本研究の限界と今後の課題

本研究は，Ｘ市にある特養ホームが運営する３か所の認知症カフェを分析対象にしたことから，対象地域や研究対象施設・研究対象者数ともに限定的であったため，認知症カフェに参加しているすべての参加者の参加意義を表しているとはいいがたい。今後は，特養ホームを設置主体とした認知症カフェを利用する多くの参加者の参加の意義を明らかにすること，他の運営主体の認知症カフェを利用する参加者の参加の意義を明らかにすること，また認知症カフェに参加できていない，あるいは参加中断となった人々に目を向けることが今後の課題であり，これらの課題を解決することによって，認知症カフェが「認知症の人とその家族・友人にとって自分らしさを発揮し，社会とかかわりを持てる場所」になり得る。

## Ⅴ．結語

認知症カフェへの参加意義を解明するために，特養ホーム運営の認知症カフェ参加者（認知症当事者とその介護者３名，地域に居住する高齢者３名）を対象に，１年間フィールドワークとインタビューを行い，エスノグラフィの手法を用いて質的帰納的に分析した。その結果，以下の結論を得た。

１．特養ホームが運営する認知症カフェの参加者のうち，認知症当事者とその介護者，地域に居住する高齢者における認知症カフェへの参加の意義は

異なっていた。

2．認知症当事者とその介護者の参加意義は，「体調に気遣い，毎日の暮らしの中での愚痴や不満に耳を傾けてくれる認知症カフェ実施者が存在し，これまで暮らした楽しい時間を回顧できる」であった。

3．地域に居住する高齢者の参加意義は，「少しでも健康を維持したいと希求し，そのための行動が叶い，外出や行事を楽しむ機会がある」であった。

認知症当事者とその介護者，地域に居住する高齢者がもつ認知症カフェへの参加意義は，それぞれ異なることを理解し運営する必要があることが明らかになった。具体的には，認知症当事者とその介護者には各々が感じている感情を共有するなどの情緒的対応，地域に居住する高齢者には健康維持のための積極的対応が求められることが示唆された。それらによって，認知症カフェが「認知症当事者とその介護者・友人にとって，自分らしさを発揮し，社会とかかわりの持てる場所」になり得る。

## 謝辞

本研究調査にあたり，こころよくご協力をいただきました認知症カフェ参加者の皆様と，認知症カフェを運営されている各団体の理事長・施設長の皆様，認知症カフェに従事されている職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

なお，本研究は，熊本保健科学大学学内研究費（2018-E-01）の助成をうけたものの一部である。

## 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## 文献

1）厚生労働省：認知症カフェ実施（概要）令和２年度（2020）実績調査．https://www.mhlw.go.jp/content/000935275.pdf〔2022.8.1アクセス〕

2）みずほ情報総研株式会社：平成27年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業 地域包括ケアシステムにおける特別養護老人ホームの実態・役割に関する調査研究事業報告書．https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000136601.pdf［2021.5.13アクセス］

3）徳野圭昭，吉田留美，増井玲子，他：在宅認知症高齢者を支援して～訪問リハビリテーションとオレンジカフェ由布での支援～．大分県リハビリテーション医学会誌，13：34-37，2015.

4）増井玲子，佐藤友美，吉田留美，他：認知症の人を介護する家族支援としての認知症カフェの意義．認知症ケア事例ジャーナル，8（3）：209-218，2015.

5）家根明子，小野塚元子，廣川聖子，他：認知症者支援 専門職にとっての認知症カフェの持つ意義と課題．奈良学園大学紀要，2：113-118，2015.

6）佐藤友美，吉田留美，中西敏子，他：施設入所中の若年性認知症の人が認知症カフェに外出することの有効性の検討．日本認知症ケア学会誌，15（2）：513-521，2016.

7）河野保子，土肥敏博，加藤重子，他：平成28年度対人援助研究ブランディング看護・医療福祉部門超高齢社会における高齢者・認知症者の健康及び世代継承性・社会貢献活動に関する看護カフェモデルの構築（第Ⅰ編）高齢者カフェの実態調査報告．看護学統合研究，19（2）：1-13，2018.

8）田代和子，小板橋恵美子，平澤マキ，他：大学と地域住民が連携協働する「認知症カフェ」の開催が利用者にもたらす成果 グループインタビューによる質的分析．淑徳大学看護栄養学部紀要，11：19-29，2019.

9）上木祐介：社会参加のきっかけに認知症カフェを活用した事例 強みを活かし「講師」としての役割獲得へ．日本訪問リハビリテーション協会機関誌，8（1）：11-15，2020.

10）田代和子，小板橋恵美子，伊藤ふみ子：地域住民と大学が協働で運営する「認知症カフェ」の成果と課題 認知症カフェの運営にかかわる住民スタッフの視点から．日本認知症ケア学会誌，19（4）：677-687，2021.

11）徳地亮，河本良二，野口泰子，他：認知症カフェの個別相談が家族介護者支援に果たす機能．日本認知症ケア学会誌，18（2）：516-523，2019.

12）横山和樹，宮嶋涼，森元隆文，他：認知症カ

フェにおける家族介護者の自己開示とソーシャルサポートおよび精神健康との関連．日本認知症ケア学会誌，19（4）：668-676，2021.
13）社会福祉法人東北福祉会 認知症介護研究・研修仙台センター：平成28 年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業 認知症カフェの実態に関する調査研究事業報告書．https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-RoukenKyoku/97_touhokuhukushi.pdf［2019.6.28アクセス］
14）角マリ子，多久島寛孝：特別養護老人ホームが運営する認知症カフェの現状とその課題 4か所の認知症カフェの取り組みから．熊本保健科学大学研究誌，19：63-76，2021.
15）武地一：認知症カフェハンドブック，クリエイツかもがわ，p36，2015.
16）James P.Spradley：参加観察法入門，田中美恵子・麻原きよみ，医学書院，pp.35-207，2010.
17）グレッグ美鈴，麻原きよみ，横山美江：よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 第２版 看護研究のエキスパートをめざして，医歯薬出版，pp.99-119.2016.
18）前掲書17）p.183.
19）前掲書14）.
20）矢吹知之，ベレ・ミーセン：地域を変える 認知症カフェ企画・運営マニュアル おさえておきたい原則と継続のポイント，中央法規出版，pp.9-14，2018.
21）安武綾：認知症とともに生きる人と家族の体験 認知症とともに生きる人と家族が歩む過程．安武綾編，認知症 plus 家族支援 地域で安心して暮らすために，日本看護協会出版会，pp.16-18，2020.
22）横山信一郎，西田佳世：認知症高齢者の在宅介護をしている家族介護者の自分らしい生き方を支える要因．ホスピスケアと在宅ケア，22（3）：282-290，2014.
23）前掲書１）.
24）水谷信子：老年期を生きる人の理解 高齢者の社会生活．水谷信子編，最新老年看護学第３版，日本看護協会出版会，p24，2016.
25）斎藤雅茂，藤原佳典，小林江里香，他：首都圏ベッドタウンにおける世帯構成別にみた孤立高齢者の発現率と特徴．日本公衆衛生雑誌，57（9）：785-795，2010.
26）野辺正雄：高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて．社会学評論，50（3）：29-39，1999.

（令和４年12月27日受理）

# Significance of participation in the activities of a dementia café managed by a special nursing home for older adults

Mariko SUMI, Hirotaka TAKUSHIMA

Abstract

Dementia cafes are one of the important social resources for realizing dementia measures in Japan. The study's aim was to clarify the significance of participation by people with dementia, their caregivers, and older adults living in the community in the activities of a dementia café. Therefore, we conducted a survey of six participants, including three persons with dementia and their caregivers, and three older adults living in the community in a dementia café managed by a special nursing home for older adults. We conducted the survey using fieldwork and interviews for one year. The data obtained from the above surveys were analyzed qualitatively and inductively using ethnographic techniques. The results revealed that:

1. People with dementia and their caregivers found it meaningful to participate in the activities of the dementia café because they could reminisce their lives that they had lived in the café, where there were people who cared about their physical condition, and empathically listened to their complaints and frustrations in their daily lives.
2. Older adults residing in the community had a desire to maintain their health as much as possible, and participating in the activities of dementia café helped them in taking steps to fulfil this desire and have the opportunity to enjoy outings and events.

Thus, these findings suggest that it is necessary to understand that the significance of participation in the activities of a dementia café is different for people with dementia, their caregivers, and older adults living in the community, and to manage the café accordingly.